

中日学術交流に横たわる隘路：周作人編『現代日本小説集』研究を例として

秋吉， 收
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門

<https://doi.org/10.15017/2740975>

出版情報：言語科学. 55, pp.41-54, 2020-03-19. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

中日学術交流に横たわる隘路

——周作人編『現代日本小説集』研究を例として

秋吉 收 (Shu AKIYOSHI)

はじめに

魯迅・周作人編訳『現代日本小説集』（1923年6月、上海商務印書館）¹は、中国で最初に出版された日本近代文学の精選集として極めて重要な意義を有する（奇しくもその一ヶ月後、1923年7月に絶交に至った兄弟二人の最後の共同作業としても注目される）。この作品集には、大正時代を中心とする15作家30篇の作品が収められ、周作人によるその序文（1922年5月20日於北京）には、次のように記されている。

日本の小説在二十世紀成就了可驚的發達，不僅是國民的文學的精華，許多有名的著作還兼有世界的價值，可以與歐洲現代的文藝相比。……中國與日本因有種種的關係，我們有知道他的需要，也就兼有知道他的便利：現在能夠編成這部創始的，……這裏邊 夏目 森 有島 江口 菊池 芥川等五人的作品，是魯迅君翻譯，其餘是我所譯的。²

魯迅周作人兄弟の文学活動の上でも重要な意義を有する『現代日本小説集』だが、その解説には中日両語を駆使する必要もあるせいか、汗牛充棟たる中国魯迅研究界においても、研究の進展は決してはかばかしいものではない。（日本での研究は着実なものだが、いかにせん絶対数が貧弱である）。

『現代日本小説集』には末尾に「附録」として、収録作家それぞれについての説明文が並ぶ。そこには各作家の略歴、文学者としての活動状況、収載作品の書誌情報などが盛り込まれ、簡にして要を得た紹介となっている。多くの作家はこの「附録」によって初めて中国文壇に紹介されており、日本近代文学と中国文壇を繋ぐ極めて貴重な資料である。³

ではこの「附録」は誰によって書かれたのか。小川利康氏はその論文「中国語訳・有島武郎「四つの事」をめぐって—『現代日本小説集』所載訳文を中心に—」の中で、以下のような見解を示している。

¹ 本稿で使用する『現代日本小説集』（1923年6月初版）の版本は、1925年12月第三版〔筆者が東京大学東洋文化研究所にて内地留学中に、受入教員をご担当下さった丸尾常喜先生がご蔵書からわざわざコピーして筆者に贈って下さったもの。黄泉の先生へ改めて感謝を表します。〕、及び中国国家図書館（北京）所蔵初版〔同济大学日文系の梁艶副教授がPDFファイル作成されたもの。ご提供下さった梁先生へも深甚の感謝を表します。〕である。両者は基本的に同一だが、奥付の体裁など微妙な差異を有する。

² 「其餘」作家とは、國木田、鈴木（三重吉）、武者小路、長與、志賀、千家、江馬、佐藤春夫、加藤武雄を指す。なお、魯迅の翻訳を「五人」とするのは、「六人」の誤り。単純ミスと思われる。

³ 1923年9月23日発行『北京週報』第81号、丸山昏迷「周作人氏の『現代日本小説集』の冒頭に、「本誌が昨年から其出版を豫報して置いた周作人氏編譯の『現代日本小説集』は世界叢書の一編として原稿が書肆の手に渡ってから一ヶ月餘でやつと發行された」とある。周作人「序文」の日付は5月20日であることから、「附録」も1922年には書かれていたと考えられる。

「關於作者的說明」(『現代日本小説集』「附録」) 各項の文章は、従来それぞれが担当した作家に関する説明を自分で書いたと考えられてきた。しかし、冒頭でも述べたように、充分な裏付けに欠けるものである。(中略) 魯迅が実際に執筆したと確定できるのは、菊池寛・芥川龍之介の項に限られ(材料不足で検討の対象から除外した作家を除く)、その他の魯迅担当分(夏目・森)も含めた残りの項目は全て周作人の手になると考えることが出来よう。⁴

周作人の序文に明記するように、総勢 15 人の収録作家のうち魯迅が翻訳を担当したのは、夏目漱石、森鷗外、有島武郎、江口渙、菊池寛、芥川龍之介の 6 人であると見られる。そして先行研究においては、魯迅担当作家の 6 人分の説明文(「附録」)は、すべてそのまま魯迅によると見なすのが一般的である。例えば、現代における最も権威ある「2005 年、人民文学出版社」版以下、歴代の『魯迅全集』には、漱石・鷗外を含む魯迅翻訳担当作家 6 人分の『現代日本小説集』「附録」がすべて収録されている。

だが小川氏の見解はそうした既存の認識に真っ向から異を唱えるものである。魯迅が翻訳した漱石・鷗外その他、菊池と芥川を除いてはすべて周作人によると推定する。果たして実際はどうだったのか。「附録」に関する議論は、かなり複雑である。当事者たる魯迅周作人はそれについて一切述べていないので、状況証拠を辿るしかない。⁵

國木田獨歩 (Kunikida Doppo, 1871-1908) 名哲夫、普通被稱作日本自然派小説家の先驅。他的傑作獨步集在一九〇四年出版，但當時社會上沒有人理會他，等到田山花袋等出來，豎起自然主義的旗幟，這纔漸漸有人知道他的價值，但是他已經患肺病不久死了。獨步集裏正直者 (Shōjūmon) 與女難 (Nyōnan) 這幾篇，那種嚴肅的性慾描寫，確為以前的小說所未有，但他的興味並不集中於這一方面，他的意見也並非從左拉 (Zola) 一派來的；他的思想很受威志威斯 (Wodzowski) 的影響，他的藝術是以那爾蓋涅夫 (Turgeniev) 為師的；所以他的派別很難斷定，說是寫實派固可，說是理想派也無所不可，因為他雖然也重客觀，但主張「以慈母一般的(對於伊的愛兒的)同情之愛去觀察描寫」為詩人的第一本義，這便與自然主義的態度很有不同了。

附録

現代日本小説集 附録

三百六十四

「附録」最初の頁

⁴ 1992 年 3 月『大東文化大学紀要』第 30 号(人文科学)。小川氏は周作人 1922 年日記の記載(「5 月 6 日 附録の編集整理を終える」)により、「附録」の執筆時期も 5 月 6 日であろうと推測する。なお、『現代日本小説集』の編集出版について、劉岸偉『東洋人の悲哀—周作人と日本』(1991 年、河出書房新社)にも考察がある。158 頁。

⁵ 筆者は現在、この「附録」の実際の著者の問題については研究を進めており、近々に発表予定である。

憎惡他們，不能訶罵他們。這就因為他們的惡的性格或醜的感情，愈是深銳的顯露出來時，那藏在背後的更深更銳的活動著的他們的質素可愛的人間性，打動了我的緣故，引近了我的緣故。換一句話，便是愈玩菊池的作品，我便被喚醒了對於人間的愛的感情，而且不能不知他同吐。Here is also a man 這一句話。」

三浦右衛門の最後 (Mitsura Uemon no saigo) 見無名作家的日記 (1918) 中。
報復的話 (Aru Karakuchi no hanashi) 見報恩的故事 (1918) 中。

芥川龍之介

芥川龍之介 (Akutagawa Rynosuke) 生於一八九二年，也是東京大學英文學科的出身。田中純評論他說，「在芥川的作品上，可以看出他用了性格的全體，支配盡所用的材料的模樣來。這事實便使我們起了這感覺，就是感得這作品是完成的。」他的作品所用的主題，最多的是希望已達之後的不安，或者正不安時的心情。他又多用舊材料，有時近於故事的翻譯。但他的複

現代日本小説集

附錄

三百七十九

「芥川紹介」最初の頁（前の部分は「菊池寛紹介」続き）

今回の拙論は、この「附録」問題を端緒として浮かび上がってきた、標題の「中日學術交流に横たわる隘路」を主たるテーマとする。中国の多くの研究者は日本語を解しないままに魯迅周作人研究にも携わるので、前述の如く、『現代日本小説集』のような研究対象は看過されがちとなる。対して日本の研究者は、すべての論文を中国語で発表するわけではないので、日本の研究成果が中国における研究に充分には反映されないことになる。そこには、国学たる中国文学研究に対する中国人研究者の矜持と、外国における研究に対する彼らの抜き難い蔑視の感情が横たわりとも考えるが、いずれにしろ、日本で発見・修正された新知見が、中国では全く顧みられず、旧態依然の誤りが延々と引き継がれている状況が厳然として存在している。

そうした意味では、拙論を基本的に日本語で日本の學術誌に掲載すること自体矛盾を孕むとも言えようが、そこは「抛磚引玉」、「隘路」が少しでも拓がることを願うのみである。

最近、北京の権威ある某研究誌に発表された、著名なる研究機関に属する研究者の『現代日本小説集』の専論⁶が、その研究の現状、問題点等々について、私たちに少なからぬ示唆を与えてくれる。まずは便宜的にこの論文（以下、「対象論文」と呼ぶ）の行論に沿って

⁶ 該論文の掲載誌は歴史と伝統のある著名な魯迅研究専門誌で、著者は中国トップレベル大学の中文系教授である。その影響力は看過できないと考えられる。

議論を進めていく。「対象論文」は、『現代日本小説集』の中でも特に芥川龍之介に注目する。まず、1921年に举行された芥川唯一の中国訪問中、魯迅が『晨报副刊』にて中国で初めて芥川を翻訳紹介した際にしたためた「訳者附記」と、後に書かれた『現代日本小説集』「附録（芥川紹介）」の関係に言及した重要な部分から引用する。

「対象論文」内容[1]：

魯迅与芥川未曾有过直接的接触，但彼此却并不陌生。特别是魯迅对芥川的作品一直颇有兴趣。他曾在1921年芥川访问中国期间，相继翻译了《鼻子》和《罗生门》。前者刊登在1921年5月11-13日《晨报》副刊的第七版上。后者则于1921年6月17-18日发表，同样刊登在《晨报》副刊的第七版上。这两篇翻译都附有译者附记，并于1923年编入周氏兄弟合译文集——《现代日本小说集》。据止庵描述，该书的附录（关于作者的说明）乃周作人编理而成，关于芥川的部分，摘录了魯迅所写的《鼻子》译者附记和《罗生门》译者附记。⁷

『周作人自編文集』（2001年、河北教育出版社）等の原資料校訂、『周作人伝』（2009年、山東画報出版社）執筆など、多くの周作人関係重要資料・文献の出版に中心的に関わる止庵氏が、『現代日本小説集』「附録」は、魯迅でなく周作人の「編理（編集校訂）」になると認識することも興味深い。末尾に引用される止庵氏の原文は、実際には「対象論文」の引用とやや異なっている。「周作人・魯迅訳『現代日本小説集』（2006年、新星出版社）に附された止庵「総序」よりここに原文を引用する。

《现代日本小说集》……该书附录系周作人编理，芥川龙之介与菊池宽两则，部分袭用了魯迅《鼻子》译者附记、《罗生门》译者附记和《三浦右卫门的最后》译者附记的字句。

ここで止庵氏が芥川と共に挙げる菊池寛については取りあえず置く。『現代日本小説集』（1923年出版）「附録」の芥川龍之介紹介部分執筆に当たって、魯迅が過去の翻訳発表時（1921年、『晨报副刊』）に既に書いていた「鼻」や「羅生門」の訳者「附記」を、周作人が参考にした。その所為について、止庵氏が「部分襲用」（部分的に踏襲した）と描写するのに対して、「対象論文」は止庵氏から引用と言いながら、「摘録」（抜き書きした）と微妙に表現を変えている。「部分襲用」なのか「摘録」なのか、その実際は気になるところだ。

次に、「対象論文」より、魯迅が『晨报副刊』にしたためた「鼻」訳者附記に、田中純⁸の芥川評価の文章から借用した部分があったとの、注目される記述を引用する。

⁷ 下線・太字などは、断りのない限り引用者による。以下同じ。

⁸ 田中純（1890-1966）：早大英文科卒、クロボトキン『露西亞文藝の主潮』（1917、春陽堂）や、ツルゲーネフの諸作品翻訳出版（新潮社）に携わる。春陽堂に入社後は『新小説』編集主任、同社『中央文学』編集にも従事。大学卒業直後より評論を多く発表している。後に小説家に転ず。また戦後は大正期文壇の生き証人としての文章を多くものした。（以上、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（1977、講談社）等による）。

「対象論文」内容[2]：

在《〈鼻子〉译者附记》中，鲁迅首先介绍芥川是日本新兴文坛中的“出名”的作家，并借用了田中纯评价芥川的评语，……最后，他（鲁迅）也表达了自己对芥川的“不满”，认为过多使用历史故事的材料的“旧材料”，且无清新文笔，难以迎合读者。

「対象論文」の見解では、魯迅は、芥川が当時の日本新興文壇の寵児（著名作家）であったことを紹介した後、田中純の評語を借用、そして最後に魯迅自身の芥川に対する“不満”を表明した。魯迅の不満の理由は、“古い材料”の多用と、清新なる文筆に乏しかったことであるという。

「対象論文」の見解を検証するために、以下まずは実際に魯迅執筆「「鼻」訳者附記」から該当部分を引用してみよう。

魯迅「「鼻」譯者附記」 1921年5月11日『晨报』副刊

芥川氏は日本新興文壇中一個出名的作家。田中純評論他說、→「在芥川氏的作品上，可以看出他用了性格的全體，支配盡所用的材料的模樣來。這事實，便使我們起了這感覺，就是感得這作品是完成的」←。他的作品所用的主題，最多的是希望已達之後的不安，或者正不安時的心情，這篇便可以算得適當的樣本。

不滿于芥川氏的，大約因為這兩點：一是多用舊材料，有時近於故事的翻譯；一是老手的氣息太濃厚，易使讀者不歡欣。這篇也可以算得適當的樣本。……

四月三十日譯者識

（文中の矢印は、魯迅自身が附した引用括弧を明瞭にするため引用者が附したもの。）

魯迅が書いたこの「訳者附記」の中で、田中純の評論からの引用は、魯迅自身が括弧でくくった約二行のみであると判断されるが、田中純の原文「芥川龍之介を論ず 文壇新人論 其一」とつぶさに対照してみると、田中純からの引用は実際にはずっと多く、この部分だけを見ても、下線部がすべて田中純の文章からの直接の引用である⁹。つまり、「対象論文」が魯迅自身の認識であると見なす「过多使用历史故事的材料的“旧材料”，且无清新文笔，难以迎合读者。」は、実際には魯迅でなく田中純の認識ということになる。

次に気になるのは、「対象論文」がその論文全編を通して重視する「他（魯迅）也表达了自己对芥川的“不满”」の部分である。だが、その「不満」は果たして魯迅自身のものだったのか、実はそれについても疑問が残る。「「鼻」訳者附記」執筆に当たって魯迅が全面的に依拠した田中純の原文には、次のように書かれている。

田中純「芥川龍之介を論ず 文壇新人論 其一」 1919年1月『新潮』第三十卷第一号

芥川君は、よく、古い材料を引っぱり出して来る。彼の作品の主要なものは、殆んど凡て、日本のクラシツクからの翻訳だと言つて可い。

⁹ 田中純からの引用については、藤井省三「魯迅と芥川龍之介—「さまよえるユダヤ人」伝説をめぐる」（『月刊しにか』1991年9月号）が提起し、その後、拙論「魯迅『野草』における芥川龍之介」（2000年10月『日本中国学会報』第52集）にても言及、考察を加えた。

或る人々は、此の事実に対して——材料が古いと云ふ事実に対して——頭から反感を感じるらしい。

この前半部分は、魯迅「「鼻」訳者附記」の「多用舊材料・有時近於故事的翻譯」に相当する部分であるが、そのあとの一文に目を注ぐと、そこには「或る人々」と曖昧ながら、芥川への「反感」つまり「不満」が記されている。

実は、同じ文章の中で、田中は次のようにも書いていた。

本統に文学者としての才分と云ふ上から云へば、芥川君は必ずしも大きな才人ではない。なる程彼には才分があるが、その才は、大体に於て、可なり子供らしい、可なりわざとらしい。可なり瑣末な不必要な才である。

これは明らかに芥川に対する田中純自身の「不満」である。実は、当該文「芥川龍之介を論ず 文壇新人論 其一」に限らず、田中純は当時少なからず発表した文芸評論の諸処で芥川批判を展開している¹⁰。魯迅の文章「「鼻」訳者附記」では田中純からの引用箇所が明記されない（というか、括弧によって“虚偽”申告している）ので、表面的には「対象論文」が言うように「不満」が魯迅のものであるように見える。しかし、魯迅が依拠する田中純の文章に鑑みるに、この「不満」自体も、魯迅自身の感慨と言うよりは、やはり田中純（及び当時の日本文壇全体の風潮）の文脈を借用したものと考える方が自然ではないか。「対象論文」は、引き続き次のように論を進める。

「対象論文」内容[3]：

以上魯迅の观点、在《现代日本小说集》的《附录：关于作者的说明》中，大部分得到了继承。值得注意的是，周作人删掉了鲁迅的“不满”，而进一步阐释了芥川的创作手法与态度。周作人认为芥川复述“古事”，是为了从古人的生活中寻找与自己心灵相通的东西，是他把古代和现代结合起来的创作手法。

同时，他引用芥川《烟草与恶魔》的序言，介绍了作家如何使自己的心情与旧有的材料合二为一进行创作的态度。

ここで「対象論文」が“魯迅的觀點”と定義するものは、実際には田中純の文章からの引用を多く含み、必ずしも魯迅本人の觀點とは限らない。また、“魯迅の”とされる「不

¹⁰ 例えば、1920年9月『中央文学』第4年第6号掲載、「芥川君に物足りない點」など。ただ、田中純は所謂技巧派に疑義を呈しながらも、芥川を一切認めていなかったわけではもちろんない。「新技巧派の意義及びその人々」（1917年10月『新潮』27巻4号）に次のようにある。「独自性の希薄な作家や作品は、それが従来の標準から見て、どれ程完全であり、どれ程現実的であり、どれ程手堅いものであっても、尚極めて低い評価をしか与へられて居ないと云ふことは、現文壇の到る所に現はれて居る現象ではないか。（中略）絵て人間的なものに対する興味であり、人間性そのものに対する無条件な認容である。此の点を特に明かに示して居るのは芥川氏である。……彼の「芋粥」に於て、あの愚直な主人公が、如何に人間らしい光彩を放つて居るかを見よ。異常にやくざな醜悪な人生の断面から、或る人間らしい光つたものを——丁度塵芥の中に光る燐火のやうなものを——摺み出して来る氏の特殊な才能には、吾々の驚異に値ひすべきものがある。」

満」も、見てきたように田中純の言説と重なり、果たして魯迅自身のものか疑わしい。

以下、「対象論文」が述べる“周作人が『現代日本小説集』「附録」執筆時に魯迅の「不満」を削除した上で彼なりの見解を提出し、周作人は更に芥川の『煙草与悪魔』「序言」を引用して解説した”ことについて、実際に『現代日本小説集』「附録」を参照しつつ確認してみよう。

周作人 (or 魯迅?) 「『現代日本小説集』附録」 (1922年5月?執筆)

芥川龍之介 (Akutagawa Riunosuke) 生於一八九二年，也是東京大學英文學科的出身。田中純評論他說，→「在芥川氏的作品上，可以看出他用了性格的全體，支配盡所用的材料的模樣來。這事實便使我們起了這感覺，就是感得這作品是完成的」←。他的作品所用的主題，最多的是希望已達之後的不安，或者正不安時的心情。(引用者注：魯迅「「鼻」 訳者附記」ではここに“不滿于芥川氏” (芥川氏に不満なのは) の一句が挿入される) 他又多用舊材料，有時近於故事的翻譯。但他的複述古事並不專是好奇，還有他的更深的根據：他想從含在這些材料裏的古人的生活當中，尋出與自己的心情能夠貼切的觸著的或物，因此那些古代的故事經他改作之後，都注進新的生命去，便與現代人生出干係來了。他在小説集煙草與惡魔 (1917) 的序文上說明自己創作態度道：

「材料是向來多從舊的東西裏取來的。……但是材料即使有了，我如不能進到這材料裏去，——便是材料與我的心情倘若不能貼切的合而為一，小説便寫不成。

……

鼻子 (Hana) 見小説集鼻 (1918) 中，又登在羅馬字小説集內。

羅生門 (Rashomon) 也見前書，原來的出典是在平安朝的故事集今昔物語裏。

引用文中、下線部分はやはりすべて田中純論文からの引用である。田中純の「芥川龍之介を論ず」を、魯迅「「鼻」 訳者附記」及び『現代日本小説集』「附録」の二篇の文章と仔細に比較対照して気付かされるのは、魯迅・周作人の二篇は、田中純原文から多くの箇所 (長短織り交ぜ約 10 箇所) を順序も入れ替えつつ断片的に引用し、謂わばモザイク的に成立していることである。

この『現代日本小説集』「附録」は止庵氏も指摘するように、魯迅「「鼻」 訳者附記」を“襲用”しているので、両者は多くの部分が重複する。田中純からの引用の明示に注目すれば、「附録」でもやはり「訳者附記」同様に引用括弧は二行分に附されるのみとなっているが、実際には、田中純の引用は全体の八割以上を占めている。また、「対象論文」が「周作人引用の」とする芥川の小説集『煙草与悪魔』(1917、新潮社)「序文」も、「附録」の著者(「対象論文」の所謂周作人)が独自に引用してきたように見えるが、実際には田中純の原文に既に引かれており、引用部分もほとんどが一致する¹¹。「対象論文」の指摘は、ここでも実際とは食い違っている。恐らくは、魯迅が実際に依拠した日本語原資料

¹¹ ただ、興味深いことに『煙草与悪魔』「序文」引用の最初と最後の一句は田中純論文には見えず、周作人 (or 魯迅?) は、田中純の論文から孫引きしたのではなく、芥川原典にもきちんと当たっていることがわかる。ほとんどを田中純に依拠しながらも全てではないことを保持する、そしてそれをさりげなく誇示する姿勢に、彼 (ら) のプライドが垣間見られるやもしれない。

たる『新潮』所載の田中純の原文に当たっていないことに起因しよう。

それでは、「対象論文」の指摘する以下の部分はどうであろう。

周作人认为芥川复述“古事”，是为了从古人的生活中寻找与自己心灵相通的东西，是他把古代和现代结合起来的创作手法。

この判断は、『現代日本小説集』「附録（芥川説明）」の以下の部分を根拠としている。

他想從含在這些材料裏的古人的生活當中，尋出與自己的心情能夠貼切的觸著的或物，因此那些古代的故事經他改作之後，都注進新的生命去，便與現代人生出干係來了

まず、前半の下線部分は田中純の文章からの引用であり、「対象論文」の言う周作人の認識にはやはり当たらない。では、後半部分はどうか。後半部分は確かに田中純の文章に直接対応する部分は見当たらないようだ。では、これこそがようやく「対象論文」の指摘する通り周作人の筆になるのであろうか。だが残念ながら、その答えはノーである。

以下、魯迅が『現代日本小説集』（1922年編集、23年出版）以前の1921年6月に翻訳し、芥川の北京入城に合わせて『晨報副刊』上に発表した「羅生門」の「訳者附記」を挙げる。

魯迅「「羅生門」譯者附記」 1921年6月14日『晨報』副刊

芥川氏的作品，我先前曾經介紹過了。這一篇歷史的小說（並不是歷史小說），也算他的佳作，取古代的事實注進新的生命去，便與現代人生出干係來。這時代是平安朝（就是西曆七九四年遷都京都改名平安城以後的四百年間），出典是在「今昔物語」裡。

二一年六月八日記

ここに明らかなように、周作人（or 魯迅？）は、『現代日本小説集』編集出版に先んじて発表されていた魯迅の「「羅生門」訳者附記」からやはり“襲用”（ここはむしろ「対象論文」の所謂“摘録”の方が的確であろうか）していたのだ。「対象論文」の考察からは、日本大正時代の日本語原資料どころか、魯迅の書いた「「羅生門」訳者附記」すら抜け落ちてしまっているのだろうか。

前述の如く「対象論文」は、中国の著名な学者による権威ある学術雑誌に掲載された研究であるが、こと『現代日本小説集』に関する限り、見てきたように危うい状況が垣間見られる。また、そうした最高峰に位置する論文の影響もあってか、中国で発表される関係論文は、管見の限りすべてが「対象論文」と同様の過誤を犯している。当然ながら早期の修正が望まれる。

さて、「対象論文」から最後にもう一箇所参照しよう。

「対象論文」内容[4]：

《烟草与恶魔》在周作人的藏书中可以找到，这就证实了前引止庵的说法，即《现代

『日本小説集』的附录乃周作人所写。

「対象論文」曰く、“『現代日本小説集』「附録」に引用された芥川の『煙草与悪魔』が、周作人の蔵書に見える。これこそまさに、『現代日本小説集』「附録」が周作人によって書かれた証拠である。”論拠は極めて明快だ。だが前述の如く、『煙草与悪魔』「序文」を引用したのは『現代日本小説集』「附録」の著者（周作人或いは魯迅）ではなく、彼（ら）が引用した田中純の文章の中に既にその『煙草与悪魔』「序文」は引かれていた。また魯迅は『現代日本小説集』「附録」よりも早い1921年の時点で「鼻」訳者附記を書いており、その「附記」の中で既に田中純の文章を引用している。つまり周作人より恐らくは魯迅の方が先に田中純の引用する『煙草与悪魔』「序文」の存在を把握していた可能性が極めて高い。『煙草与悪魔』が周作人蔵書であろうがどこに架蔵されていようが、魯迅が『現代日本小説集』「附録」（少なくとも「芥川龍之介紹介」）の筆を執った可能性は否定できないのである。

また、魯迅周作人の蔵書については、興味深い観察がある。藤井省三氏は以下のように述べている。

魯迅が北京・八道湾の邸宅で周作人と同居していた時期には図書を共同購入しており、現代文学を周作人が、古典を魯迅がそれぞれ管理し日記の「書帳」「書目」欄に記録していた様子である。¹²

では、実際に魯迅「書帳」と周作人「書目」の内容を見てみよう。『現代日本小説集』「附録」が執筆されたと推測される1922年については、魯迅の日記が失われている¹³ので、ここではその前年1921年の日記を考察の対象にする。

1921年の魯迅日記「書帳」（抜粋）¹⁴

王世宗等造像二枚 一・〇〇
豆盧恩碑一枚 一・〇〇
雜造像五種六枚 二・〇〇
元詳墓誌一枚 一・〇〇
雜磚拓片三枚 〇・五〇
李盛墓誌一枚 一・〇〇
商務印書館印宋人小説十五種二十二冊 六・〇〇
說苑四冊 〇・四〇
忠義水滸傳前十回五冊 一・〇〇
毛詩草木疏新校正本一冊 〇・八〇

¹² 藤井省三『魯迅と日本文学—漱石・鴎外から清張・春樹まで』（2015年、東京大学出版会）、56頁。

¹³ 許広平の回想によれば、魯迅の日記は戦時中日本の官憲に没収され、1922年分は結局帰ってこなかった。そこには魯迅が接触した日本人の名前が多く記載されていたため等の憶測がある。現在ごく僅かに残るのは、遺失前に許寿裳が抜き書きした分のみである。

¹⁴ 『魯迅全集』（2005年、人民文学出版社）、453頁。

李長吉歌詩三冊 二・七〇
楞伽經三種譯本記二枚
大乘起信論海東疏二冊
越縵堂日記五十一冊 許季勳贈

本年除互易者外、共用買書錢百三十七元一角九分

列挙されるのは「造像」「拓片」「墓誌」、種種の古典文学、仏教関係書籍である。現代文学或いは日本語等外国書籍は一切見えない。魯迅「書帳」におけるこの傾向はこの時期まで一貫している。では、周作人の方はどうだろう。

1921年の周作人日記「書目」（9月以降に限る）（抜粋）¹⁵

小唄傳説集 藤澤衛彦
ローマ字書き小説集 土岐哀果編
近代文藝史論上 高須梅溪
荒絹 志賀直哉
美しき町 佐藤春夫
埋れてゐたもの 武者小路
野天の光り 千家元麿
日本民謡集 生田春月編
日本國語辞典一 上田、松井
幻燈 佐藤春夫
ホキットマン詩集第一輯 有島武郎訳 茶谷君贈
啄木全集第三冊 新潮社編
英國短篇小説史 (这里有用世界語写的文字)
布施太子の入山 倉田百三 曠野社寄贈

以上 英書一一共計三六種三九冊
和書二五

1921年は周作人が肋膜炎で休養した年であり、日記執筆も途絶えがちで購入書目もかなり少ないが、自身が最後に書き付けるように、すべて英文書と和書（及びエスペラント書）等の外国書であり、魯迅の書帳に見えるような、古典書籍などは一切登場しない。この傾向はこの頃までの日記に一貫している。

藤井氏の書くように、魯迅と周作人は書籍の購入とその記録を確かに分担していた。二人の日記に綺麗に分類して記載されるが、それらの書籍は同居する魯迅と周作人二人の“共用”の下にあったのだ。1923年以前の魯迅の日記書帳に日本書が一切登場しないから、当時魯迅は日本書を読まなかったという解釈は全く成立しない。なぜなら、兄弟が絶交に至った1923年以降の1924年から、一転して魯迅の日記書帳には大量の日本書籍が記録され

¹⁵ 『周作人日記（影印本）』（1996年、大象出版社）、215-218頁。

るようになるのであるから。¹⁶

芥川龍之介の小説集『煙草と悪魔』は1918年の「周作人日記書目」に記載があり、また魯迅が1921年に翻訳した芥川の名作「鼻」を収める小説集『鼻』（1918年、東京春陽堂）も、やはり1919年の「周作人日記書目」にのみ記録される。周作人日記の上にだけ形跡を留める芥川の二冊の小説集だが、魯迅は確実にそれらを手にとっていた。そればかりか、魯迅はそれを用いて中国初の芥川翻訳紹介を成したのである。

「対象論文」の“『煙草と悪魔』は周作人の蔵書の中に見出せる（だから周作人のみが読んでいた）、その事実が『現代日本小説集』「附録」を周作人が書いたことを証明する”という結論は、やはり成立しない。

見てきたように、魯迅そして周作人は、中国の研究者（少なくとも「対象論文」著者）の想像を遙かに超えて、実際に日本の当時の文壇と直接触れ合っていた。芥川その他日本近代文学を翻訳する際には、初出の雑誌を繕き初版の作品集を買い求めるなど、可能な限り原典と向き合い、真摯に対応していた。『現代日本小説集』「附録（作者に関する説明）」執筆に当たっては、各作家、作品を解説するために、芥川解説における田中純引用にも顕著なように、日本にて発行される雑誌・書籍を渉猟し、そこから自分たちの解説に利用できる記事を丹念に収集していたのである。

二

2019年6月、一冊の本が中国で出版された。題して、『日本魯迅研究史論』¹⁷という。日本における魯迅研究に対する評論は幾度となくものされてきたが、総頁400頁に及ぶ大部の成就是あまり例がない。現在における一つの集大成と呼んでもよいであろう。その内容は、時代ごとの魯迅と日本の関係史を総括した上で、竹内好、丸山昇、伊藤虎丸を中心に、新島淳良、北岡正子、木山英雄ら魯迅研究専著のある研究者を経て、丸尾常喜、そして藤井省三までの「魯迅像」を総覧したものである。附録として、2015年までの日本における魯迅研究専著と魯迅関係翻訳の一覧を挙げる。内容としては、新奇はないが概ね妥当なもので、大いに精力的な研究と見える。中国における日本研究の前衛たる吉林に位置する最重点大学の面目躍如といったところであろう。

ただ、最後の一章「終章 日本魯迅研究の歴史回顧及びその展望」を読むに至り、筆者は改めて「中日学術交流に横たわる隘路」、いまだ越え難い壁の存在を感じたので、ここに引用して拙論の結びとしたい。

「終章 日本魯迅研究的历史反思与展望」

……“魯迅像”时期最本质的特征，那就是凭借魯迅反思日本。

……

¹⁶ 魯迅の「1924年日記書帳」には初めて、中国古典書籍に交じって厨川白村『眞実はかく伴る』『苦悶の象徴』、その他『トルストイとドストエーフスキー』等の日本語訳書が並ぶ。1925年以降も同様。

¹⁷ 靳叢林 李明暉等著 [吉林大学哲学社会科学学术文库] 『日本魯迅研究史論』、2019年、北京：社会科学文献出版社。

鲁迅の視野は广阔的、鲁迅の眼光是深刻的、鲁迅的精神是坚韧的、能够体会鲁迅文学热度与力量的研究者，必然是为严重的困境而焦虑着的人，竹内好、丸山升、伊藤虎丸等走上鲁迅研究道路时正是这样的人。

.....

像战时意识那样把鲁迅扭曲成贬低中国歌颂日本的工具当然更是荒诞、而像后来的学者那样只把鲁迅当成一个学术研究对象的余裕又是绝对没有的。

.....

日本战后形成的学术体制已经过于成熟而变得有些机械，我们目前很难找到像竹内好那样与学术机构保持距离，以独立思想者与写作者身份而具有广泛影响力的日本鲁迅研究专家，……期待竹内好的精神传人，或者说鲁迅在日本的精神传人在下一代学者中更多地涌现，为我们带来惊喜。

「鲁迅によって日本を省察する」、この書の著者ひいては中国の研究者にとって日本の鲁迅研究は、竹内好や丸山昇そして伊藤虎丸のような、日本軍国主義による中国（アジア）侵略の闇を省察するものでなければならない。そうした研究者でなければ真の意義はない。泰斗たる竹内、丸山らの著作の多くは中国語に翻訳され、中国の研究者にも身近な存在であるが、該書に所謂「その後の研究者」の著作、その成就是はまだ多くが中国に浸透していない。そのことは、拙論で考察した『現代日本小説集』研究にも明らかであった。今後は、一層の研究交流が必要であろうし、新しい世代の研究は新たな意識で切り拓いていかねばならぬことを俟たない。

私たちはもとより中国の研究者を「驚喜」させるために研究しているわけではない。中国には中国の、日本には日本の、私には私の鲁迅がいて何ら問題はない。常に変化推移する流行に棹さして、変わらぬ価値を見据えつつ研究を進めていきたいものだ。

おわりに

鲁迅周作人の共同作業になる『現代日本小説集』が、具体的にはどのような役割分担になっていたか、それを探る重要な手掛かりの一つが翻訳、そして「附録」執筆に当たって使用した版本である。この問題についても、中国文学と日本文学の相互にわたる詳細な調査が必要となることもあり、ほとんど手をつけられていないのが現状である。全面的な考察は次稿に譲るが、ここにその一端を記しておきたい。

「附録」の芥川紹介の末尾に、「鼻」及び「羅生門」翻訳に当たって使用した版本について、次のような但し書きが附されていた。

鼻子（Hana）見小説集鼻（1918）中，又登在羅馬字小説集内。

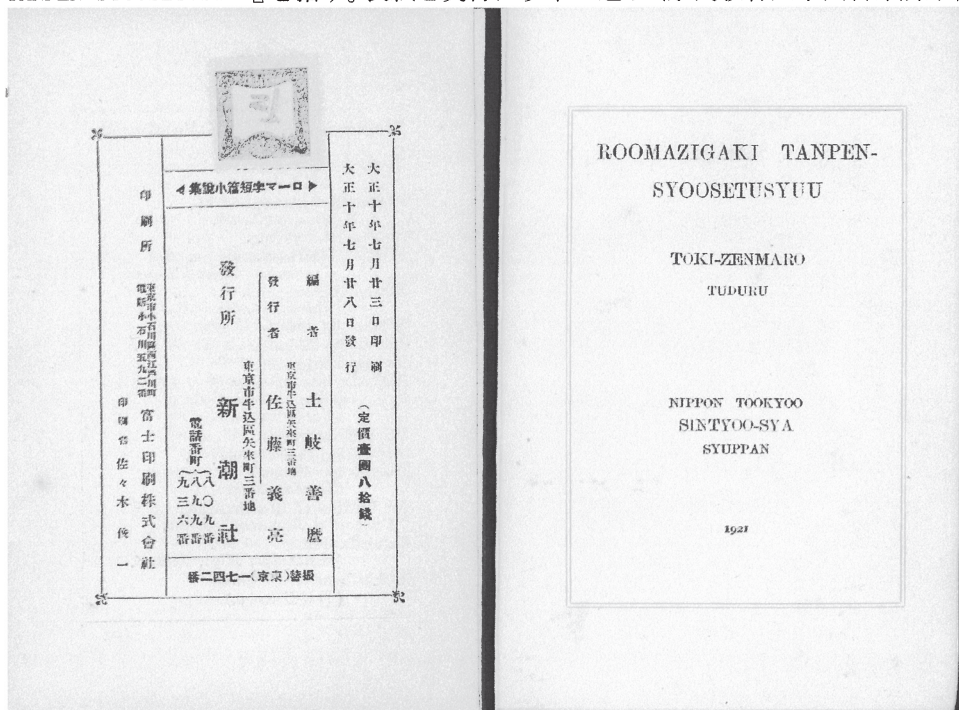
羅生門（Rashomon）也見前書，原來的出典是在平安朝的故事集今昔物語裏。

「鼻」は小説集『鼻』（1918年、春陽堂）に依り、また「羅生門」も同様であるという。「羅生門」については、芥川の依拠した原典が『今昔物語集』であることもきちんと記し

ており、果たして魯迅（周作人）が実際そこまで原典を辿ったかどうかとも気になるが、ここではまず「鼻」についての記述を精査してみたい。また「羅馬字小説集」とは一体何であろうか。

まず、芥川「鼻」の発表状況について。原載は1916年2月、東京堂より刊行された（第四次）『新思潮』創刊号である。「龍之助」と署名されたこの作品は、漱石に激賞されたことで一躍文壇の寵児となった芥川の出世作である。その後、新潮社にその地位を脅かされつつあった春陽堂が満を持して刊行した「新興文芸叢書」¹⁸の第八編として大正7年（1918年）7月に出版されたのが、「鼻」「羅生門」「芋粥」「手巾」「孤独地獄」等代表作13篇収録の芥川作品集『鼻』であった。「羅生門」末尾の有名な一句「下人の行方は、誰も知らない」がこのシリーズで初めて採用されて定着するなど、芥川研究にとっても重要な意味を持つこの『新興文芸叢書第八編 鼻』を、『現代日本小説集』への翻訳に当たって魯迅が使用したことはもとより興味深いのが、逆に、使用版本として挙げられていない原載雑誌『新思潮』創刊号を、魯迅（或いは周作人）は見えていないのか、その辺りも非常に重要だと考える。次稿への課題としたい。

また、「附録」に挙げられる「羅馬字小説集」については何の説明もないが、それは1921年に新潮社から出版された、土岐善麿¹⁹（TOKI-ZEMARO）編（TUDURU）『ROOMAZIGAKI TANPEN-SYOOSSETUSYUU』を指す。表紙と奥付は以下の通り（奈良教育大学図書館所蔵初版本）。



¹⁸ 春陽堂「新興文芸叢書」、また新潮社との勢力争いなど当時の日本文壇の状況について、紅野敏郎『大正期の文芸叢書』（1998年、雄松堂出版）などを参照した。

¹⁹ 土岐善麿（1885-1980）：歌人。東京浅草の真宗大谷派寺院に次男として生まれる。早大英文科入学後、同級の若山牧水、北原白秋らと交流する。卒業後、堺利彦、大杉栄を知り思想転換。それを機にローマ字運動に従事するようになる。明治、大正、昭和にわたってローマ字著書多し。戦後は文部省ローマ字教育協議会議長なども歴任。（以上、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（1977、講談社）等による）。

土岐による「端書き」には次のようにある。

ローマ字書きの優れた読み物を作るために、現代の主な作家にお願いして、その得意の短篇を一つずつ選んで頂いた。（原文ローマ字：引用者注）

収録される芥川の「得意の短篇」は、「鼻」である。ローマ字テキストを、初出『新潮』（1916）及び「新興文芸叢書」（1918）と比較してみると、初出に依る部分もあれば、初出の誤りについて丁寧に修正を施した部分もあり、また随所に脚注が附されている（もちろんすべてローマ字）。つまり、土岐の「端書き」に記される通り、少なくとも芥川に関する限り、作者本人が丁寧に対応しているのだ。この出版はローマ字による単なる奇抜な所為というわけではなく、編者と作者が協力して良いものを創出しようとしたことが如実に窺える。編者の土岐が左翼思想の影響の下でローマ字運動に入っていったように、そこには関わった者の世界観と強い意志が確かに投入されていた。それはあたかも魯迅周作人がエスペラント（世界語）運動に邁進したのと同様の所作であった。そして、『現代日本小説集』「附録」にさりげなくこの「羅馬字小説集」が引かれるのも、日本のこうした運動に対するエールだったのかもしれない。²⁰

追記：本研究は、JSPS 科研費 18K00355 の助成を受けたものである。

²⁰ 『ROOMAZIGAKI TANPEN-SYOOSSETUSYUU』収録作品は以下の全 17 篇（収録順）。正宗白鳥「玉突屋」、岩野泡鳴「指の傷」、有島生馬「鳩飼う娘」、小山内薫「色のさめた女」、高浜虚子「十五代将軍」、鈴木三重吉「金魚」、小川未明「小さな喜劇」、志賀直哉「清兵衛と瓢箪」、芥川龍之介「鼻」、武者小路実篤「或日の一休」、中村星湖「人形」、上司小剣「美女の死骸」、徳田秋江「子猫」、徳田秋声「日向ぼっこ」、江馬修「長崎にて」、有島武郎「小さき者へ」、島崎藤村「家畜」。